

例会報告：2014年4月1日（晴れ）第1838回 通常例会

会場：小田原卸センター内会議室
時間：12:30～13:30

◆ 会長挨拶



露木 清勝 会長

今日は4月1日、新年度初日であります。桜も満開ですし、例年ならどこも人出が増え始め、行楽の春となるところですが、今年は本日から消費税率のアップということで、8%の税率になりました。皆様方の企業ではどの様に影響してくるのでしょうか。商売、商売によってその影響の仕方は違って来るのですが、自分の商売で申し訳ございませんが、私どもの製品は、生活必需品ではありませんから、おそらく4月、5月のゴールデンウィーク、本来なら売上が期待できる時期なのですが、例年を下回ることが十分予測できますし、その後の夏にかけて、持ち直すことが出来るのか・・・大変不安なところです。

先週末、小田原・箱根商工会議所の議員総会がありました。新年度の事業計画、予算案が承認されましたが、総会の冒頭、先日も我がクラブへ卓話に来ていただいた、新会頭は自分の所信を流々述べられました。その最後のところで強調されていたのは、地元でお金を回すことの重要性でした。考えて見れば小田原・箱根だけではなく、全国的に地方都市の中心市街地は衰退の一途をたどっています。どこの町でも、首都圏の大資本の展開するチェーン店にその商売の座を奪われています。以前にもお話したかもしれませんが、「商店街はなぜ滅びるのか」の著者の新雅史氏は、近年「雇用の流動化の問題」がよく取り上げられるが、かつて存在していた日本社会の安定は、終身雇用、年功賃金等、雇用の安定のみで成り立っていたわけではなく、商店街の経営主をはじめとした豊かな自営業によっても支えられていた。つまり『自営業の安定』という翼、『雇用の安定』という翼、この両翼の安定が戦後の日本社会の政治的、経済的安定を実現してきたと述べています。つまり、大資本へお金を回すのではなく、地元の経営主の間でお金を回して行くようなシステムを考えなければ、アベノミクスはおろか地域それ自体の存在が危うくなります。

冒頭の消費税率アップの問題は、本来なら国の財政再建を促し、日本の発展に寄与するべきものですが、今のままでは、地域経済に良い影響をどこまで与えられるのか、不安要素の方が大きいような気がします。地域が元気にならないと決して国の発展も望めないような気がします。

また、今月は雑誌月間です。「ロータリーの友」に寄せられる記事にも、貴重な情報がたくさん掲載されています。是非役に立てていきたいと思っております。

◆ 幹事報告



金山 慶昭 幹事

1)来週の例会は移動例会です。報徳会館で16時30分より登録の開始となり、17時から例会が始まります。参加者も会員のほとんどの方がご出席をしていただただけそうで、絆友会から4名、RACは3名、ホストファミリーは2名と総勢で52名程になる予定です。桜も今は満開ですが遅く咲く桜もあるそうですので楽しみにしててください。

〈理事会報告〉
「早春の集い」の決算報告があり承認されました。5月20日の施設訪問の計画書が審議され承認されました。後日御案内がありますが、例会は行程時間の関係で現地での例会開催となります。植物工場の見学や靖国神社、科学技術館、横浜の中華街を回って帰ってきます。大邱松林RC35周年の訪問の件が承認されましたが、この後の委員会報告で担当委員会より報告があります。

◆ 委員会報告

国際奉仕委員会・中村リーダー

韓国姉妹クラブの公式訪問日程が決まりました。6/27～29の二泊三日になります。できるだけ多くの方にご同行いただきたく費用も68,000円と決まりました。申し込みは4/8までとなります。35周年の記念式典ですですので是非ご参加ください。

次年度・大川幹事

本日準備理事会があります。また各委員長、プロジェクトリーダーの方は活動計画書を作成の上、4/22までにご提出をお願いいたします。

◆ 出席報告

大木 清 委員

出席報告	会員数	出席	M.U	出席率
4月1日	47(43)	43	0	100%
3月25日	47(43)	33	0	76.74%
3月18日	47(42)	33	1	80.95%

【欠席者】 0名
【今回MU】 0名
【前回MU】 増加なし
【前々回MU】 増加なし

◆ Table Flower

- フリージア
- スターチス
- ルピナス

フリージアの花言葉は「無邪気」
スターチスの花言葉は「知識」「誠実」
ルピナスの花言葉は「いつも幸せ」



◆ 卓話

「報徳の森プロジェクトと林青会について」



報徳の森プロジェクト第二代会長
竹広林業(株)代表取締役社長
高木 大輔 様

報徳の森プロジェクト第二代会長、木材業協同組合青年部・小田原林青会会長の高木です。まず、林青会について説明させていただきます。木材組合は材木屋の集まりで、普段は当然ライバルです。その中で“木”をキーワードに、一人ではできないことに力を合わせていこう、街に何か貢献していこうという取り組みで始めました。

こちらは子供たちの課外授業などで使う紙芝居です。この“2”という数字。日本は世界でも有数の森林国で、世界で2番目に森林率（土地の面積に対する森林の割合）が高い国です。以前の日本は燃料として木材が使われていたため、木はあまり多くありませんでした。それが時代を経て燃料が変わり、現在国土に対する森林が66%にもなっています。次に“20%”という数字。日本は森林国ですが、国産の木を使っている割合はたった20%なのです。日本で消費しているのはほとんどが船で海外から来る木材です。日本の森林はどうなっているのか、私たち小田原がどういう状況か、説明します。神奈川県はほとんどが平野で、山は県西地域から丹沢方面だけです。県西は都心から近くて海・山・川があり、世界に誇れる寄木の技術が生まれた場所でもあります。しかし実際、この近辺の山は何も手が入っていない状態が大半です。木を伐り出しても活用されないという現実があるのです。木は育ち続け、満員電車のようにひしめきあって立っている状態です。すると光が入らなくなり、土壌が硬くなります。豪雨の時など雨が地中にしみ込まなくなり、川が氾濫する原因にもなっています。そこで今、林野庁を筆頭に間伐事業をしています。山に光を入れて草が生えるようにし、土を柔らかくするためです。しかし間伐した木は利用されず、捨てられた状態です。使われない理由の1つは木材の質で、日本全国の山に今アカネトラカミキリ虫という害虫がいて、中に傷がついた木が多いからです。そこで林青会は森林資源を活用して何かできないかと2つの問題提起をしました。



1) 山で捨てられた材料を活用する。
2) 捨てられた木をどう使ってもらうか考える。木は森林組合、木材業組合、それを加工する箱根物産連合会や工務店と流れていきます。その大本の森林組合と我々はそれまで交流が無く、それがまず大きな問題でした。そこで3年前、組合同士が繋がって1つの大きな動きが始まったのでした。山で切った丸太を製材するところから我々の範囲になりますが、製材所も県西では2ヶ所程度しかありません。森林組合と繋がりができたことで、いこいの森近くの土場の横に製材所を開くことができました。併設されたことで利便性が良くなり、更に人が集まるようになりました。

現在、もう1つの課題「どう使ってもらうか」に関して日々活動しています。まず木を知ってもらうことが大事だと考え、子供たちに向けて木育の活動を始めました。幼稚園で間伐の効果を見せる実験をしたり、木で作ったジャングルジムで遊んでもらったりしています。昨年はいこいの森で「森と木に包まれる夏まつり」を開催し、遊びながら木や森を体験してもらいました。また、大井高校PTAが30周年記念でげた箱を木で作ってくれました。生徒さんも大事に使ってくれているようです。町田小学校は火災で体育館が燃えてしまったのですが、解体する時にソメイヨシノを2本伐らなくてはならなくなりました。捨てるのは忍びなくてそれで校歌のボードを作ることになりました。6年生たちと1年間かけて木材や象嵌技術の勉強をしながら一緒に作り上げました。卒業式に招待していただいて地元との繋がりが強くなったと思います。

こちらは小田原市役所のカウンターです。木を模したカウンターを地元の素材で作りました。小田急線改札のチラシ置き場も、スチールのテーブルからヒノキ・杉・松のテーブルに変わっています。城山商店会にはプランター兼ベンチの制作を依頼されました。

今年初めには、無印良品有楽町店の展示スペースをお借りしてジャングルジムや木琴、小田原城の松などを使った正月飾りを展示しました。東京でも木に関心を持っている方が多く、たくさんの人に見ていただくことができました。木の魅力、小田原の魅力を伝えられたかと思えます。そしてこれからもっと木を使ってもらうためには家を作るころまで持っていかなければなりません。小田原市と一緒に幾つもの団体が一つにまとまって作ったのがこのバンガローです。小田原の職人が全て小田原の木で作りました。ここでシンポジウムが開かれ、学識経験者の方が大勢集まって小田原を評価してくれました。

最後に報徳の森について説明します。二宮尊徳繋がりの福島県相馬市に、小田原の森の木を加工して被災地支援をするという行動です。仮設住宅の集会場が寒々しい雰囲気だったので、木の内装に変えました。クリスマスツリーをプレゼントしたり、木のポストを作って小田原の子供たちに木の手紙を入れてもらったり、そういう活動をしています。これを通して、地元資源・地元の人材を使うことで動きが出る、物と同時に人の地産地消もできれば地元活性化につながる、ということを感じました。これからも木のある街を目指して活動していきたいと思っております。